

3色配色の調和性に関する研究<1>

—個人データの考察—

150441109 野々山 太郎
川澄研究室

1. はじめに

音楽における「解決」とは、不協和音から協和音へ音が推移することを指す。「解決」により、協和音を単一で聴くよりも聴者に深い満足感を与える効果をもつことが知られている。浅野らは、色彩においても同様の効果が起こると仮定し(図1)、不調和な3色配色から調和した3色配色へ時間的に推移させることにより同様の効果があるかどうかを調べたところ、調和性が向上する配色とそうでない配色があることが確認された[1]。しかし、36人の被験者の個人データを読み解くにはいたらなかったため、本研究では、同じ配色を用いて再実験し、調和性の向上について個人データを考察する。

2. 実験方法

先行研究と同一の5組の3色配色を用いた。実験刺激として、“不調和”配色のみ提示する方法(提示A)、“調和”配色のみ提示する方法(提示B)、不調和配色から“調和”配色に推移する方法(提示C)の3種類を用意した(表1)。(本報では、実験者が予め調和・不調和を予想して作成した配色を“調和”配色・“不調和”配色と書く。)実験刺激は、21型ディスプレイ(EIZO FlexScanS2100)上で視野角10°の大きさで10秒間提示する。被験者は、最後に提示されている配色の組合せの良し悪しを7段階(-3~+3)の評価値で回答した。数値が高いほど調和性が高いことを示す。被験者は色覚異常のない大学生24名で、所要時間は15分程度である。

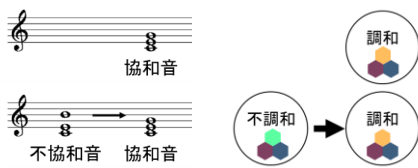


図1 音楽における「解決」の色彩への展開

表1 実験刺激

	提示A ("不調和"配色)	提示B ("調和"配色)	提示C ("不調和"配色→"調和"配色)
配色1			
配色2			
配色3			
配色4			
配色5			

3. 実験結果

図2に、各評価値の被験者平均を示す。提示A~B間、提示B~C間でそれぞれT検定を行なった結果、5%水準で有意差がみられたのは、配色5のみであった。すなわち、配色5では“不調和”配色(提示A)より“調和”配色(提示B)の方が調和性が高く感じられ、さらに時間的に推移させた場合(提示C)に調和性が向上することが確認され、先行研究の結果と一致した。

図3は、個人データ21人分に対し、提示BよりCが調和性が向上した人数比を示したものである。青の表示は向上、赤の表示は低下を示す。図から、配色4では、調和性が向上すると感じる人、低下すると感じる人が共存することや、図2で有意差がみられた配色5においても、提示BとCの調和性は変わらないと回答した被験者が最も多く50%以上を占めることなど、個人の特性が把握された。

4. まとめ

“調和”配色の直前に“不調和”配色を提示することで、“調和”配色の調和性が向上するかという課題に対して再実験を行ったところ、人によって結果に差異があることが改めて把握された。

参考文献

[1] Asano Akira, et al: Temporal transition enhances the consonance of color arrangements, Color and Imaging Conference, Vol.2017, No.25, pp.240-244 (2017)

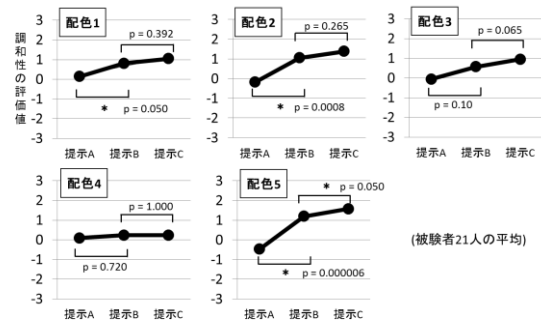


図2 提示A~Cの評価値の被験者平均

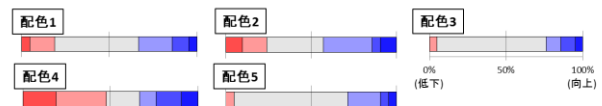


図3 提示Cでの調和性向上の人数比